
“キボウ”の定義

ヤンデルー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“キボウ”の定義

【Nコード】

N3131Z

【作者名】

ヤンデルー

【あらすじ】

イジメを受け人生に絶望し自ら命を絶った高校生“佐々木 亮太”。

しかし死んでなお絶望は続く。

無限に広がる絶望の中に希望はあるのか

2011年12月20日午後1時14分

ある一人の人間が死んだ。

その人間の名前は佐々木 亮太 15歳、高校1年生。

小・中学校で酷いイジメを受けており高校に最後の希望を持って入学するも、もちろん同中学校出身の生徒もいて高校生活でもイジメを受ける。

どんだんエスカレートするイジメに対しクラスメイトも教師もイジメを黙殺。親や親戚には相談できず耐え忍ぶもついに自殺。

遺書に自分をいじめていた人間への恨みを書き残すも偶然にもイジメを行っていたグループが発見し遺書は処分される。

佐々木 亮太の死からこの不条理な物語は幕を開ける。

キーンコーンカーンコーン

授業の終わりをチャイムが告げる。

このチャイムを聞いて教室でただ一人うつむいている人間こそが佐々木 亮太である。

教室から担当の教師が出ていくと笑ながらクラスメイト4人が佐々木に近づいて来た。

佐々木は机で顔を伏せていて表情はわからないが、脅えて肩が震えている。

4人が佐々木にの机の前についた。

教室の中ではその4人だけじゃなく教室内のほぼ全員が佐々木の方を見て笑っている。教室に佐々木の味方は1人もいない。

バシッ

いきなり4人の内の1人が佐々木の頭を叩く。叩かれた佐々木が頭

を上げると制服の襟をつかみ無理やり立たせると

1人が後ろから腕を抑えて他の3人が顔や腹などを殴り始めた。

「痛いっやめてゴメンなさいっ放してっ」

佐々木が嫌がるとますます楽しそうに殴り続ける。

チャイムが鳴る頃には佐々木は涙で目を腫らし殴られた場所には痣ができていた。

昼休みになり皆が昼食をとっているがそこに佐々木の姿はない。

トイレの中で何かを書いている、遺書だ。

遺書には自分にイジメを行っていた奴らやそれを黙認していた教師やクラスメイトへの恨みを残した。

それをポケットの中に入れ佐々木は次に屋上へ向かった。

屋上まではすんなりで行けたがそこからが問題だった。

佐々木は屋上にあるフェンスを乗り越えあと1歩足を踏み出せば落ちるといふ所まで来てしまった。

しかし自分では覚悟を決めたつもりでもいざ“死”と隣り合せになつてみると、あれだけ死を望んでいたのに

死に対して恐怖を感じてしまう。

ドクンッドクンッ

心臓の音を感じ始めた。それでもあと1歩勇気が出ない。

キーンコーンカーンコーン

昼休みが終わった。屋上に来てからいつの間にか30分が経っていた。

佐々木はついに覚悟が決まらず教室に戻ろうとした。

その時、自分をいじめているあの4人が歩いているのが目に入った。

「どうせ戻ってもいじめられるだけだ。それならもうここでっ」

佐々木は目をつぶり屋上から飛び降りた。

人生への絶望と恨みを抱いて

ドチャンっ

6階建ての校舎の屋上から飛び降りて佐々木の体はグチャグチャに潰れた。

痛くはない。ただ血が流れる感覚だけが残る。

「死ぬのってこんななんだ。思ってたより・・・」
そこで全てが終わった。

終わったはずだった。

だが佐々木は意識を取り戻した。

「何だよっここは？」

佐々木が目にした光景は学校の教室とそこにいる人間達。学校の教室といっても佐々木の通っていた学校ではない。どこかもわからない学校の中にいるのだ。

教室には年齢や性別はバラバラの人間が14人もいる。

佐々木は目を閉じた。

考えることを放棄してこれは夢だと思い込もうと努力した。だが考えまいとすればするほど色々なことを考えてしまう。

俺は死んだんだ。イジメに耐えれずに学校の屋上から飛び降りて死んだ。

ならここはどこだ？死んだんだから天国？あの世？とてもそんな風には思えない。

「君い大丈夫？」

佐々木が考え込んでいると誰かから声をかけられた。

佐々木が目を開けると目の前には綺麗な女性きれいがいた。

「大丈夫？」

黙り続ける佐々木にもう1度声をかける。

「あっは、はい大丈夫ですっ」

佐々木はわけもわからず答える。

「もしかして君も自殺者なの？」

「えっ何でそれを？」

自分が自殺したという事実を知る目の前にいる女性に対し不信感を抱く。

「あつゴメン違った？今ここにいる人達みんな自殺したらここに来たみたいだから」

「ここにいる人全員？」

まったく状況を理解できず言われたことを聞き返すことしかできない。

「そうよ。私は櫻田涼子あなたは？」

「お、僕は佐々木 亮太」

櫻田を完全に信用したわけではないが質問には素直に答える。

「あのおこ何なんですか？」

次は佐々木が質問する。

「どこかの学校のようにだけど・・・何とも言えないわ。ドアも窓もどこも開かないし

窓の外は真っ黒だし」

「えっ？」

佐々木は急いで窓を見る。確かに窓の外は真っ黒で何も見えない。窓に近づき触ってみる。とくに変わった様子はない。

でも開けようとしてもビクともしない。

鍵がかかっているわけでもなく、ただ単に窓の開きが悪いんじゃない。

そこに窓が固定されているかのように動かない。扉も同じだった。

「ねっ開かないでしょ」

「うん・・・」

佐々木が素っ気なく答える。

「どうかした？」

櫻田は佐々木の答え方の変化に戸惑いを感じる。

「あのおっ……櫻田さんも自殺したんですか？」

佐々木が小さな声を震わせて櫻田に質問する。

「えっ……そうよ私も自殺してここに来たのよ……」

櫻田の声のトーンがいきなり下がる。

「あっスイマセンっ」

櫻田の声のトーンの変化に気づき即座に謝る。

「いいのよ別にあたしも同じこと聞いたしね……」

佐々木はなぜこんな明るい人間が自殺したのわからずにいた。

10分程沈黙ちんもくが続く。

ピンポンパンポン

いきなりスピーカーから音が流れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3131z/>

“キボウ”の定義

2011年12月11日21時51分発行